目で見て肌で感じる会津漆器

A2201221 十塚ちはる

研究の概要（背景）

会津漆器には古くから受け継がれながらも、新たに展開される伝統や文化が内包されている。しかし、漆器や会津を知らない人にとってはその良さが伝わらないのではないかと考える。それに加えて、会津漆器は伝承的なデザインの日用雑器が多いため地味なものが多く、若年層には取っつきにくく感じるのではないかと考えた。そこで、視覚的に楽しみながら会津らしさを感じて、利用しながら漆器の良さやその中にある歴史的な会津を感じるような造形的な漆器を提案する。

研究のねらい

・視覚的に楽しめるデザインにするためには、装飾だけでなく箱の形状も目を引くようなデザインにするべきだと考える。そのため、複雑な形状も制作できる乾漆技法で取り組み、板物にはない柔からさを表現し、日用雑器でありながらインテリアとしても活用できるデザインにする。

・漆器を愛用している人も含め、漆器を使用しない・関心のない人にも漆と会津を知ってもらえるようなデザイン提案をして、両者の知名度上昇を図る。また作品内で漆の素材としての表現と、技術研究も目的として、その可能性を追求する。

研究のプロセス

アイデアスケッチ、デザイン決定
道具作り
粘土原型
石膏原型
離型剤
錆付け
下地付け（細→中→荒）
麻布貼り（細→荒→荒→細）
脱乾
下地付け（荒→中→細）
錆付け
下塗り
彫刻（透かし彫り）
中塗り
上塗り
加飾

粘土原型

石膏原型

錆付け

麻布貼り

脱乾

下地付け

考察

一目で箱と分からないような形状にする時に、箱が持つ立方体や直方体のイメージから外れた曲面を活かしたデザインにすることによって、視覚的に楽しめるようになったのではないかと思う。また、今回の研究のねらいである“漆と会津を知ってもらう”ことに関しても、会津若松市の花であるタチアオイを写実的と前衛的に表現し、透かし彫りで立体的、平蒔絵で平面的な装飾を施すことにより表現できたのではないかと思われる。

通常の箱とは形状が大きく異なるデザインのため、完成した箱を実際に使ってもらい、箱としての使い心地、デザインによって空間の雰囲気を損なわないかを調査できればよかった。今回は見た目重視のデザインにしたため、使用感によっては更にデザインを洗練させる必要があると考える。

この作品を制作するにあたって、以前に実習授業で精密乾漆を学んでいたが、予想以上に大変だった。箱全面が曲面だけで構成されている為、道具作りの時から粘土原型に狂いが出ないように実習の時よりも一つひとつの工程に時間が掛かり、特に粘土原型や石膏原型の制作では修正の繰り返しで予定以上の時間が掛かってしまった。しかし工程を終え、綺麗な曲面が出来上がる度にやりがいや楽しさを感じることができた。